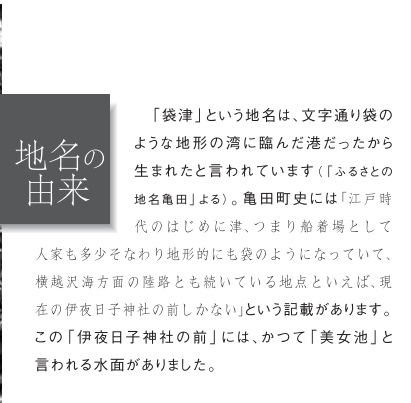




# 袋津とは

信濃川の河口で、「地図にない湖」といわれた湿地帯亀田郷。袋津は、その中でも古くから集落が形成されていた第一砂丘列(直山～袋津～城山)上に農村在郷町として発展しました。かつては、北は亀田寺の手前、亀田小学校内の一部、東は向山と麓の三条岡、西は都町旧都座付近にあった十郎橋、南は城山の一部(亀田中学校内の一部)までが「袋津村」でしたが、明治34(1901)年に亀田町と合併、平成17(2005)年には新潟市と合併し、現在「袋津」という呼称は一部の住所表示に残るのみとなりました。



## 地名の由来

「袋津」という地名は、文字通り袋のような地形の湾に臨んだ港だったから生まれたと言われています(「ふるさとの地名亀田」による)。亀田町史には「江戸時代のはじめに津、つまり船着場として人家も多少そなわり地形的にも袋のようになっていて、横越大海方面の陸路とも続いている地点といえば、現在の伊夜日子神社の前しかない」という記載があります。この「伊夜日子神社の前」には、かつて「美女池」と言われる水面がありました。



明治頃の伊夜日子社付近(明治27年要正図による)



絵図「亀田郷治水史古図」



寛永16年横越島絵図(市川内郡野青木正昭氏所蔵)

## 袋津の歴史

### 500年以上、もしかしたら平安時代から続く歴史

「袋津」の名前はさまざまな資料の中に見ることができます。「中蒲原郡誌」には、「吉老の伝ふる所によれば、幾野七兵衛なるもの大同年中(806～809年)之を開発し、椋垣(おさかき)村と称せしが上杉氏の時袋津村と改称せしにやいうといえど難も後世符会の説にして信を播くにたらず」とあります。また、亀田郷治水史古図「寛治六(注:1092年=平安時代)年ノ海津及び其后ノ大風ニヨル大変化ノ圖」には、「亀田郷の芦沼に存る第一砂丘列に唯一(袋津前名 椋垣)」という表記があります。これらは伝承を書いたもので、「府会の説」(=こじつけ)というように、確かなものとは言えない面もありますが、圓行寺(地図)開山一行が村にはいったのが1520年といえますから、少なくともその頃には集落が確立していたと言えるでしょう。

慶長17(1612)年の「新発田藩御蔵納同拓方帳」(亀田町史)には、「横越本村」「大淵村」「二本木村」等と並び「袋津村」の表記がありますが、亀田の他の地区の記載は見られないので、これ以前は袋津以外の亀田の地は、まだ村として成立していなかったと考えられます。さらに寛永16(1639)年の「横越島絵図」には、第一砂丘列上の地域の表記に「城山新田」「所島新田」「船戸山新田」のように、新しく開発されたという意味の「新田」が使われていますが、唯一「出雲権御分袋津村」だけは「村」の表記になっています。これらの資料から、袋津がこの地域の中でも特に古い歴史を持っているのがわかります。

## 椋垣

おさかき

### 袋津はドンぐリの里?

中世期以前( 年以前)、袋津は「椋垣村」と呼ばれていました。「椋(おさ・ひ)」とは織り機に横糸を通す付属具のことで、「椀(ひ)」とも書きます。しかし、この当時の袋津で織織りが盛んだったのかどうか定かではなく、「椀」という字は「どんぐり」とも読みますから、もしかしたらこれはどんぐりのなる木のこともかもしれません。中世以前の袋津界隈は、どんぐりのなる木で垣根や砦を作っていた…そんな想像もできますね。

亀田東小学校の校章。椋3本と竹(笹)の葉を組み合わせたもの



## はたぎょう 機業のまち

### 憧れのアイドル「袋津織姫」

機業のまちとして栄えた袋津。全盛期には通りを歩いていても機織機の音が聞こえたといえます。機織り工場で働く女性たちは「袋津織姫」と呼ばれ、近隣の若者の憧れの的でした。戦後は「細糸着尺地」を扱う機屋が隆盛し、昭和40年代の袋津には30軒ほどの「機屋」と、「撚糸」「染色」「整理」「仕上げ」といった分業を担う工場が中浦向・池の山地域を中心に集まっていた。しかし近年、繊維商品は徐々に中国製を中心としたアジアからの商品に押され、現在では袋津地区で機業関係を営む工場は数少なくなっています。



「袋津織姫」は亀田五郎といわれています。

## 伊夜日子社

### オバサの信心深さが袋津にお礼をもたらす

明治35(1902)年発行の「伊夜日子神社之景」図(袋津:伏見氏所蔵)では、「創立当時の次第は記録の微するものなきを以て、されども古来よりの口碑(言い伝え)によると」として伊夜日子神社の創始の言い伝えを記していますが、まことに伝わる伝承にはこんな話があります。

袋津村一番の旧家とされる機野家(現在は在村していません)のオバサが、毎月弥彦神社に参詣していました。遠いところをやってくるオバサを気の毒に思った神社が、自分の屋敷に祀るようにとお礼を渡し、喜んだオバサはその通りにお堂を建てます。このお堂がオバコ堂で、伊夜日子神社の始まりだという物語です。伊夜日子神社は天香具山命を祀った神社ですが、天照皇大神と、池の山の旧家に祀られていた建御名方命が合祀され、現在ではこの三神が祀られています。天保4(1833)年旧暦6月3日に拝殿が上棟され、これを祝った祭礼が7月14・15日の袋津祭りとなりました。本殿は明治25(1892)年10月に袋津の名工・宮大工前田左五郎により新築され、その記念碑は拝殿の裏で見ることができます。拝殿は昭和47(1972)年8月3日に大淵の宮大工・佐藤七蔵によって建て替えられ、社務所も新築されました。鳥居は広島の大島神社と同じ、四脚の稚児柱を持つ両部鳥居です。



上左:天保4年上棟時の横礼(伊夜日子神社所有) 上右:伊夜日子神社の鳥居、四脚の稚児柱がある。神社の社格は国幣中社



## 袋津祭り

### 灯籠押し

### 例大祭のメインイベント

袋津は7つの集落に分けられます。祭りで登場する灯籠は、それぞれの地域は独自に持っているものです。祭りの7月14日の朝、奉納された灯籠は午後各集落で巡行し、夜に宮登りが行われます。本来灯籠宮登りは宵宮の晩のみ行われていましたが、現在は14・15日両日行われ、現在は15日の晩が灯籠押しのメインとなっています。各集落が宮登りの道中出会った他の集落の灯籠と力比べをする灯籠押しつけあいのステージと、クライマックスの宮登りは毎年多くの観客で賑わっています。また、宮登りに先駆けて奉納される山の女神楽組の神楽も人気があります。



写真提供:NPO法人環境/09-21

### 一番組(宮前(27)・向(28)・宮浦(29))

お宮付近の灯籠組で花飾りは「梅に牡丹」。かつては三王山(現亀田中学校付近、標高6mくらいの小高い砂丘だった)の麓で山を遊ばせるといことから「向」と名が付いたともいわれる。袋津で古くから開発された地域で、正福寺は昔この三王山麓にあったと伝えられる。

### 二番組(岡山(31))

かつての「茨島」(圓行寺付近の地名)「下里(さか)小路(中浦向きに向かう小路)」の一部を含む灯籠組で、花飾りは「牡丹」。バス通りだったメインストリートが中央を貫く。圓行寺の門前地として、商店や古い家が並ぶ。

### 三番組(砂岡(33))

旧家、庄屋が並ぶ地域の灯籠組で花飾りは「桜に牡丹」。古くから本家弥彦灯籠祭りにも参加している。独自の灯籠保存会を有し、毎年宮登りにはこだわり、息のあった勇姿を見せつける。

### 四番組(池の山(34))

かつての「塚の山」「向山下」までを含む地域の灯籠組。本来の花飾りは「桜」のみだったが、近年は「桜に牡丹」を飾る。灯籠を中断していた時期もあったが、昭和53(1978)年復活。近年は本家弥彦灯籠祭りにも参加を続ける。15日のみ宮登りを行う。

### 角力組(中浦向(30))

中浦向とは浦向と中向を合わせた呼び名で、かつては祭りの境内で相撲興行を取り仕切っていた。花飾りは「牡丹に蝶」。相撲興行を取り仕切れるだけの且那衆が多かった地区で、かつての機屋・旧家のお屋敷が連なる。相撲興行は戦後一度取り行われたがその後は行われず、昭和54年頃灯籠組として参加。平成8年30区の灯籠保存会が発足し伝統の継承に努める。15日のみ宮登りを行う。

### 都町組(都町(26))

昔が一番組に属していたが、昭和34年頃都町組として独立、当初は博御興だった。花飾りは「梅に牡丹」。JR信越線で小学校区が割れコミュニティが分かれたが、袋津の西の商店街として栄えた地域。かつてのバス通りには「都座」という劇場もあった。14日のみ宮登りを行う。

### 神楽組(山の下(32))

神楽舞を奉納する組。昔の袋津の中の新聞地で、新しく身を持った者が多いため灯籠組よりも神楽舞を運んだと古老は言い伝えるが定かではない。14日の晩と15日の日中神楽舞を奉納する。



## 迷路のまち

ふくろづ

# 袋津を歩く

制作にあたりご協力・ご尽力いただいた東小学校コミュニティ協議会委員の皆様、そして取材に際して快く応じてくださった袋津住民の皆さんに感謝いたします。

参考文献  
「亀田町史」  
「ふるさと地名 亀田」  
「亀田の歴史」  
「亀田の歴史お話し」  
「袋津保存会三十年のあゆみ」

発行日:2008年  
協力:亀田郷土資料館 館長 三村啓司  
編集:亀田学会 伊藤純一  
デザイン:オフィスカイ(山田浩子・石田吉美)

発行:東小学校コミュニティ協議会